

動物の大切さ

六年 秋山耕大

ぼくの家では犬を一匹飼っています。その犬は黒色のミニチュアダックスフンドでフォックスという名前です。小型犬の男の子でとても優しい性格の犬です。年は五才で人間の年れいだと四十才位です。小さくてかわいいのに実はぼくより大人です。

そんなフォックスと生活しているぼくですが小学校から家に帰って来るとお父さん、お母さんは仕事で家にはいません。ただいまと言って玄関を開ける家には必ずフォックスが待っていてくれます。ぼくは一人ではありません。家にはフォックスがいるのでさみしい気持ちを忘れて安心した気持ちでお父さんとお母さんの帰りを待つことができます。ぼくを安心させてくれるフォックスにとっても感謝しています。でも本当はフォックスもぼくが帰ってくるまではさみしい気持ちなのかもしれません。ぼくが帰ってくると「クンクン」と鼻を鳴らしてかまってほしいさをアピールして来ます。「クンクン」鳴いているフォックスと遊んであげるとすごく楽しくて、ぼくもフォックスもさみしい気持ちがかかずに飛んでいってしまいます。自然にふれあえて互いに楽しい気持ちになるってこれが家族なんだなあと思います。なのでフォックスは大切な家族の一員で大切にしないとイケないと思います。それと

フォックスはぼくがお父さんやお母さんに怒られていやだなあと思つてるときや元気がないときに「大丈夫」と心配そうな顔で近づいてきてくれます。そしてぼくの顔をなめたりして元氣付けてくれるのでフォックスはぼくにとつてきず薬のようにやさしくいやしてくれる存在です。

時々、テレビで動物がぎゃくたいを受けたニュースを見たりします。そんなニュースを見るとついフォックスの方を見て「こんな大切な存在」なのはどうしてだと思います。フォックスや他の動物達は人と同じ大切な命があります。ぼく達は動物達と一しよに生活するとき、しっかりと愛情を持ってストレスを与えないようにしなければいけません。命はとても大切です。

ぼくは、フォックスと暮らせてとても楽しいし、とても幸せです。フォックスのことは今まで以上に大切にして長生きしてもらいたいと思っています。